

知恩院方丈庭園

— 書院建築の庭 —

<http://www.kyoto-arc.or.jp>

(公財) 京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館

寺の歴史 知恩院は東山三十六峰の第二十一峰、華頂山の西側山麓に位置する浄土宗の総本山です。平安時代末期に法然上人が吉水に草庵を結び、上人の死後、弟子の源智が大谷寺を創建したのが始まりで、その場所は現在の勢至堂の付近とみられています。永享3年(1431)、応仁元年(1467)、永正14年(1517)と、3度の火災により焼失しますが、その都度、朝廷や幕府の援助を受けて再建されます。

江戸時代には徳川家康により青蓮院の寺域の一部が知恩院に寄進され、上の段(旧知恩院の地域)、中の段(諸堂伽藍の地域)、下の段(塔頭の地域)の三段に分かれた大伽藍が造営されます。引き続き、2代将軍秀忠により三門、経蔵が建立されて一応の完成を見ますが、寛永10年(1633)に中の段が火災に遭い、大方丈、小方丈、御影堂などが焼失します。現在の知恩院の伽藍は3代将軍家光により再建された姿です。

庭の歴史 庭園は、大方丈と小方丈の東側と南側に面した、瓢箪形の池を中心とした池泉観賞式になっています。面積は約3,135㎡あり、寛永19年(1642)からの再建時に、小堀遠州と親交のあった僧玉淵と量阿弥により整備されたと伝えられています。

方丈庭園のある中の段は、鎌倉



写真1 1次調査で見つかった洲浜状の池底(北西から)



写真2 2次調査 景石と土囊(北西から)

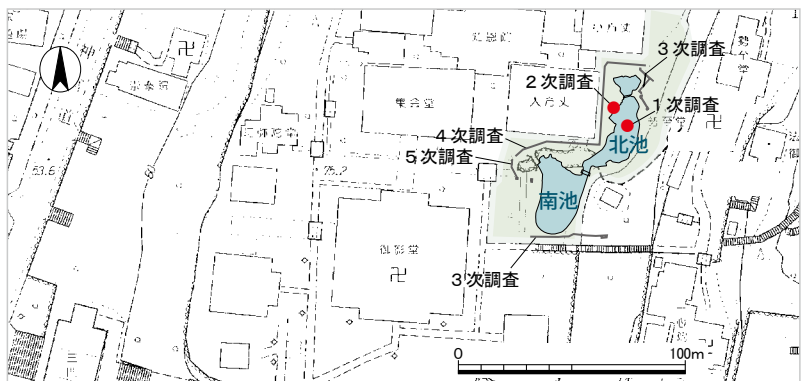


図1 知恩院方丈庭園とその周辺

時代に金沢(北条)^{さだあき}貞顕が築き、室町時代には足利尊氏が拠点とした、常在光院^{じょうざいこういん}があった場所ではないかといわれています。

常在光院はいくつかの文献に名前がみられるものの所在が確定しないため、幻の寺といわれていますが、応永年間(1394～1428)に作成された「太子堂百毫寺古図」^{おうえい}には、青蓮院、白毫寺、知恩院、常在光院などが描かれ、現在の方丈から経蔵の間が常在光院の推定地とされています。しかし、常在光院の名は金沢文庫・徒然草^{つれづれぐさ}・園太暦^{えんたいりやく}など多数の文献に見られるものの、場所が特定される資料が少ないのが現状です。知恩院方丈庭園は平成2年(1990)に京都市指定名勝となりました。

調査の概要 庭園整備にともなう調査として2005年から2007年にかけて2回(1・2次)、庭園内の防災工事にともなう調査として2011年と2012年に3回(3～5次)実施しました(図1)。1次調査では洲浜状の池底や、池の東側斜面の滝組から石橋までが一連の石組であったことがわかりました(写真1)。2次調査では汀^{みぎわ}が緩やかで洲浜に続くこと、現在の陸部



写真3 北池 西岸の石組(南東から)

の下から景石と、その周囲では池を埋めるのに使われた土嚢^{どのお}を検出し、それらは厚さ約0.4mの版築された整地層で覆われていました(写真2)。4次調査の園路下からは、景石もしくは護岸と思われる花崗岩を2石検出しました。

おわりに 知恩院庭園を描いた絵図がいくつか残っていますが、池の形や中島の数が描かれた時期によって異なっています。当初は浅い緩やかな池であったことが調査から判明しており、その後、石組護岸(写真3)に改変されます。調査では改変の時期は明確にはできませんでしたが、池が火災に備え、防火用水の役割を兼ねるため

深く掘り直されたのではないかも考えられます。

また、寛政11年(1799)に描かれた『都林泉名勝図会』^{みやこりんせんめいしよずえ}(図2)には、「知恩教院方丈林泉」として庭園が掲載されています。景石などの細部までは不明ですが、池の形や石橋の位置、御法石などは現在の庭園と大きく変わらないことから、いくつかの改変を経て、庭園として落ち着くのが寛政年間以前であったと推測されます。方丈庭園の前身の姿や、家康、家光の時代の庭園、さらに改変された庭園の姿を思い描きながら、それらを発掘調査で実証したいと考えています。(近藤章子)



図2 『都林泉名勝図会』巻之二(国際日本文化研究センター所蔵)画面左に北池、右に御影堂が描かれている。